

大通和座通信

Y A M A T O Z A

日々新面目

其の二十三

安東伸元

去る四月の或る日曜日、一人の友を偲ぶ集まりがあつて出かけたところ、七十三歳か七十四歳になる高等学校同窓の者が六十五名参集して、まずその数に驚き且つ又感銘をうけた。われわれが惜別の心を寄せた友は、昨年末の大和座通信九十三号に、その急逝を記させていた。だいた岩倉一雄君である。さて私は、当日参加できなかった友人に、この偲ぶ会の様子を知らせる手紙を送り、その中で次のような一文を認めた。《全くと言っていいくらい邪気のない彼の人柄が、巧まずしてこれだけの人を参集させたのでしょ。かつては、社会の要所には彼のような高士高潔の人物がいて人間の流れを円滑にし、汚泥の沈積を防いでいたのだらうと思いません。今は、着飾ってはいるものの性情卑しく、心の中身は悪

意と邪気一杯という人間が、肝心の重要な拠点に棲息跋扈していて、世の中を劣悪化させているように思えてなりません。昔から狂言の稽古人には、知性に裏打ちされた雅味が感じられ、その上世相についても一言をもつた人が多かったように思います。私が稽古を始めた頃（昭和三〇年）を振り返つても、稽古人のほとんどは男性で、画家・俳人・大店の主人・教員などといった多士済々の人たちでした。つまり、人生の有為転変をたつぷり味わい、その中で色々な稽古事を体験してきて、最後に落ち着いた先が狂言であつたという推測と理解が成り立つような方たちが、未だ青二才の私にさまざまな精神的影響を与えてくださったように思います。さて、四、五年前に岩倉君の心を狂言がとらえたようです。剛柔併せ持ち、人の心を正しく、しかも優しく洞察し、何の衒いもなく真偽を正す行動をとれる彼のような人物をも惹きつける力が、古典芸能「狂言」に内蔵されているという証しを私は彼を通じて確認することができたような気がします。大和座狂言事務所主催の催しには必ずと言っていいほど顔を出し、誠実に謡を歌っていた彼の姿が、今もはつきり瞼の裏に焼きついている。それに又後日いろいろお話を伺う中で、彼が大勢の方たちを私たちの催しへ勧誘案内してくれていたことがわかった。古典と言うも

の存在理由を正しく理解し、自らへの適切な摂取を果たし、その上で普及をも必要と考えてくれた岩倉君の鋭い感性に、私は大いなる敬意と悔しい惜別の情を衷心より贈る者である。と同時に、古典伝統的なものと人間の関係は、ごく普通にかく有つてしかるべしという好例を見る思いがするのである。先進近代国家建設への方向に舵を切り、西欧合理主義思想を無節操に振り入れて国作りをしてきた結果、今日に至つて「根幹を持たぬ人間への変容」という重大な問題が生じたと言説する人が多い。そして、信じられないような事件が起こる度に、この意見が論卓に顔を出す。日本人の変容あるいは崩壊と論じられる現象は、自国の古典伝統的なものが人間形成の場に正しく組み込まれて作動していない事が原因で起こると考えられる。人間の背骨である人格と感性は、その民族が歴史的に積み上げてきた古典文化を様々な形で体験し、その体験刺激が各人の心身へ日常的に注入されることによって形成される。少なくとも西欧では、国家の基盤にこの仕組みがしっかり埋め込まれているように思われる。わが国にあって古典というものが、在りのまま無垢の姿で存在し、誰でもが気軽に触れられる様相にないという現状が、衆人の目に怪しく映り、近年やっとその事について考え始める人間が現れ出したように思う。

古典伝統芸能については、西欧の有名店の豪華なカタログを見せられるような様相で紹介がされる。ブランド商品を宣伝する、高級感満載の目録のような印刷物の氾濫がそれである。カタログは国の意向に沿った内容で作られた(国の古典文化行政の方針に沿った)ものであるから、上流階級を自負自認する者たちは、まずこれを一応粗略には扱わない。つまりセレブ意識を満足させる、ブルジョワ志向の催しという枠囲いが一つ出来上がるわけである。郷愁を持つて情緒的に古典を鑑賞したいと考える常識派の良民大衆は、憧れをもってこの目録を大事にして欲ぶが、一方多様な価値観を理解する文化人層のインテリゲンチヤの中には、このカタログが見せかけであるという匂いを嗅ぎ取つて、容易には近付かない。国家や民族の文化などに何らの意識も持たない大多数の大衆は、もともと古典伝統芸能に毛筋ほどのつながりも持っていない。その結果、驚くほど多数の国民が、この国に生まれながら、この国の古典伝統芸能に一度も触れる事なく死んでゆく。これが只今、我が国の古典伝統芸能を取り巻く国民の一覧図である。そして困った事に、この最後の分類の中に、国の将来を担う青少年が含まれると思われるのである。古典伝統芸能の世界では、演者の名を告知するに際して、幾つかの特定の苗字が並ぶ不思議

がある。同じ姓を名乗ると言う事は、何らかの姻戚関係につながれた一族郎党の集団ということである。この姓を名乗つてさえいれば、いかに若輩未熟であろうとも選ばれた者としての特権が与えられ、将来が約束されるという世界に類例を見ない独特の構造様式がある。芸術分野における評論・研究というものは、真理の探究と新人の発掘を主体に展開され、恣意的な専横や固定を正す姿勢をもつものである。しかるに古典芸能の評論は、先ずこの特殊集団構図に疑問を呈する事がなく、むしろその存在を歴史的故実によつて飾り立て、普遍的でない鑑賞様式を説いて、特別な芸術であるかのような風様作りを徹しているように見える。またこの構図からは、家の子以外の新人が登場する機会は皆無だから、評論家による真正正銘の新人の発掘などはありえない。その上この構図しか知らない愛好者である観客は、演者の思想や信条に即した演劇芸術的解説を求めてなどいないから、批評は独善的かつ専門的な記述が専らで、心に響いて思想にまで影響を与える考究が生まれにくい。このような需要と供給の論理で、今日の古典伝統芸能社会構造が存在しているのである。そしてこの構図は、国の古典芸能文化行政のままに形成されたものであつて、奇妙な権威的衣をまとわされているがために、市民権を得る事の出来ない古典演

劇文化という装いから脱皮ができないままなのである。この間、小学四年生になつた娘が、学校から「生きる力」と題したリーフレットを持ち帰りました。発行者は文部科学省(初等中等教育局教育課程課)で各頁を飾る標題を紹介すると、次のとおりである。《「生きる力」をはぐくむという理念は、これまでも、これからも大切「生きる力」とは、知・徳・体のバランスの取れた力、社会全体ではぐくむ「生きる力」、新しい学習指導要領では、学校で子どもたちの「生きる力」をよりいっそうはぐくむことを目指します。家庭をはじめとして、社会全体で、子どもたちの「生きる力」をはぐくんでいくことに、ご理解とご協力をお願いします》そのほか、《学習指導要領の改訂のポイント・授業時数の増加・具体的な改善内容・小・中学校における、平成二十一年四月から実施のスケジュール・子どもたちの現状》などに関する記述が一五頁に綴られていた。例えば「伝統や文化に関する教育を充実します」とある項目を見ると、国語の時間では「小学校で古文・漢文の音読を行います。社会の時間では「小学校では国宝などの文化遺産、中学校では江戸時代の教育・文化や近現代史など、歴史学習を充実します。音楽の時間では「唱歌や楽器の学習を充実します。保健体育の時間では「中学校で男女共に武道を必

修にします、と読める。そして最後に、浅田真央さん、石川遼さん、紺野美沙子さん、野村萬斎さん、野依良治さん、日野原重明さん、よしもとばななさんに「生きる力」の趣旨にご賛同いただき、「生きる力」のサインをいただきました。と締めくくられている。これは国の機関である文部科学省が、国民に読むことを奨励している公式文書である。父兄の一人である私にとっては、この書の一読を政府から要請されているのである。理屈は抜きにして、私はこれを精読して大変不快を覚えている。子どもは生きる力を育む事に、わざわざ国から理解と協力を願われる筋合いはない。親なら願われずとも当然、日々その事の重要を認識して子どもと接している。文部科学省の役人は、この当然の事を、そう考えない親が多いと判断して、このような老婆親切心の冊子を作ったようである。おまけに今話題の有名人を登場させて、興味関心を引き出そうと目論んでいるようでもある。そうだとしたら、これは国民を著しく愚弄する姿勢である。私は当事者（父兄）の一人として、痛烈にそう感じている。教育は人間の根幹である。根幹については、格調高く毅然とした文言で真理を問いかけてほしいと思う。国家は、真理については振れることなく低きに合わすこともなく、凛とした態度を示すべきである。「生きる力」を培

い育むものは、人間の手垢に汚れていない、あるがままの古典伝統文化である。これは世界に共通する自明の理である。古典文化は、国家機関が恣意に統制管理すべき性質のものでは決してない。民族の財産である古典が遍く国民の心に根を張り、果実の自由な摂取を可能にする社会機構の整備こそ、国は力と資金を費やすべきである。この自明の理を活かす抜本政策に取り組むことなく、膨大な税金をつぎ込んで先手の補綴を繰り返しているのが、わが国の現況であるように見えてしかたがないのである。全国の幼稚園、小・中学校の児童生徒に配られた、この小冊子制作に要した費用は如何ほどであったのか。これこそ税金の浪費だと言えそうである。

(五月二十五日)



安東 伸元(あんどうのぶもと)

一九三五年生まれ。一九六四年能楽協会入会、狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。一九八一年より教育機関へ出講。現在、羽衣国際大学名誉教授、大阪芸術大学・大阪府立東住吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤講師。二一年、重要無形文化財(能楽)保持者総合認定を受ける。「日本能楽会」会員。「大和座狂言事務所」を主宰。

狂言を読む 「宗論」

山田師久

最近の話題は、国際宇宙ステーションに日本の実験施設「きぼう」が設置されたことだ。現在の宇宙ステーション施設は、酸素を吹き出す音が大きく、都会の雑踏の中にあるような騒音に悩まされているそうだ。それが新しい実験施設「きぼう」ではホテルのロビー程度に騒音を減らすことができたといい。これも日本の科学技術のお蔭だと報道された。

しかし、これだけ科学の進歩した時代でも、宇宙は謎に充ち満ちている。その謎の宇宙空間に科学の粋を集めた国際宇宙ステーションが建設され、長期に渡って人間が滞在し、様々な実験や観測をするというのだ。こんな話は半世紀前にはサイエンスフィクションの世界でしかなかった。しかし、科学の発展のお蔭で人類はフィクションを現実のものにすることができたのだ。この科学というものは私たちの世界で必要不可欠のものとなってしまっている。私たちが着ている服も、食べ物も、住んでいる家も、人類が生きていく基本のすべてが科学に依存してしまっているのだ。一方、科

学的发展和ともに地球の環境が破壊されていることが、明らかにようになってきた。私たちは科学の進歩によって、地球の環境を破壊する物質を次から次へと生み出してきたのだ。フロンガスによるオゾン層の破壊も、二酸化炭素の増加による地球温暖化もその最たるものである。また、科学によって生み出された様々な物質は、自然の中で簡単に分解されない物質が多い。例えば、プラスチックごみ、放射性廃棄物、工場から排出される化学物質、工場の煙突から出される煙、そのほか様々な金属性のごみ類などがそうである。化学物質などは川から海に流れ込み海流のつて世界中を汚染し、焼却ごみから出るダイオキシンや散布された農薬などは風に乗って地球を巡回しているのである。そして世界中の人々が環境破壊を放置しておけなくなり、地球環境問題の解決を諮るべく洞爺湖サミットが開かれる。

さて、永井均は『こどものための哲学対話』という著書でペネトレという猫に「地球はほんとうに丸いのか」という疑問を投げかけ、実は丸いというのは科学的見方によるものだとしている。さらに「クジラは魚だ」という項でも「クジラを哺乳動物とするのは内部を重視する科学的分類にのつとつたもので、外部を重視すれば魚の形をして、海で泳いでいるから魚類じゃないか」

としている。私たちは生活の中に科学が入り込んでいるから、科学的見方を当然のものとして考えているが、それはあくまで一面でしかないということはこの猫との対話集で語っているのだ。つまり、この世の中に数ある宗教のなかに、科学という宗教があると考えればよい。そうすると、幸せをもたらずはずの科学という宗教によって人類の文明は大きく進歩したものの、その一方で人類を破滅に導いてきたのだ。

ところで、最近『今昔物語集』巻十三をぼちぼちと読んでいます。この巻の四十四話全てが法華経による功德の話である。たとえば「加賀の国の翁和尚、法華経を讀誦せる語」「東大寺の僧仁鏡、法華を讀誦せる語」などなど、法華経を讀むことで功德を得たり、法華経を書写することで功德を得たりする話が収録されている。これらの物語を讀んでみると、平安時代末期から鎌倉時代にかけての、まだ仏教が伝来して五百年ぐらいいしかたない時代の仏教観が窺えて、なかなか興味深い。その今昔物語の時代からさらに五百年ぐらいい経った室町末期から安土桃山時代のころには、仏教は様々な宗派に分かれ、それぞれが群雄割拠のごとく信者を増やし、権力を持った。宗派同士で争いが起き、宗教論争も何度もあった。それを宗論という。古くは弘安元年（一一七八）に日蓮の弟子、富木常忍が天台僧と

宗論をして勝利したという記録がある。また歴史上、最も有名な宗論は天正七年（一五七九）安土城下の浄厳院で行われた浄土宗と法華宗の僧が論争をした安土宗論であろう。ここではその時の宗論の問答の様子を少し引用してみる。南禅寺の長老、景秀鉄叟と因果居士が審判となり、宗論が始められた。まず浄土宗の僧が「法華八軸（八巻）の内に念仏ありや」と問うと、法華側は「念仏あり」と答える。さらに「念仏の義あらば、何ゆえ法華は念仏無間地獄に墮ちると説くや。」と問うと、法華側は「法華の弥陀と浄土の弥陀と一体や、別体や。」と問い返す。浄土側は「弥陀は何処にある」と、弥陀一体なり。」と答える。（中略）浄土側が「法華を捨つるとの経文あり。浄土経には善立方便顯示三乗とあり。また一向専念無量寿仏ともあり。」と問うと、法華側は「無量義経には、以方便力、四十余年末頭真実とあり。」と言う。また、浄土側が「釈尊が四十余年の修行をもって以前の経を捨つるなら、汝は方座第四の『妙』の一字を捨てるか、捨てるか」と問うと、法華側は「今言うは、四十余年の四妙中のいづれや。」と問い返して、「法華の妙よ」と浄土側に言い返され、返答できず黙っていたので法華宗の負けと判定された。

おそらく狂言「宗論」はこの安土宗論を

うことか。（了）

元にして作られたのであろう。それはこの問答の中に狂言の台詞の元となったと思われる言葉が随所に見られるからだ。とくに安土宗論では「妙」の一字によって、法華宗が敗者となった。狂言宗論も「妙」の一字を最後の謡いに入れていた。それは「法華も弥陀も隔てはあらず、今より後は我らが名を妙阿弥陀仏とぞもうしける」と、同じ仏教でありながら、論争するということへのアイロニーを込めたのだ。信長はこの宗論で敗北した法華宗を徹底的に弾圧したといわれている。あるいは洛中でたびたび騒動を起こす法華宗を弾圧するため、最初から仕組まれたのだという説もある。いかにも信長のやりそうなことである。しかし、民衆はどのように見ているかというところ、狂言「宗論」に描かれているように皮肉をもつて見ているのである。法華宗も浄土宗も元は同じ仏教、権力抗争のような宗論は無益なことだと。

さて、科学を宗教の一つと考えるならば、狂言「宗論」の提起するアイロニーをどのように捉えるとよいだろうか。所詮科学も非科学も同じということになる。科学の力で宇宙に進出しようと、また地球の環境の回復を願って科学を批判しようと、結局は同じこと。宇宙に知的生命体が出現し、文明を築き繁栄し、やがて滅亡するという自然の摂理は曲げることなどできないとい



山田 師久（やまだ もろひさ）

一九八六年より安東伸元に師事。中世文学及び芸能を専攻研究。大和座狂言事務所の学術ブレン。月例輪読会の座長を務める。学問的指導の他、若いスタッフたちには人生問題の良き相談役として長兄的存在。高等学校国語科教師。

ゆとりと教育

〜絵筆と過ごす贅沢な時間〜

森五六九

何かとせわしい今日にあつてまさにそれは至福のひとつだ。十人も座ればいっぱいになるカウンターのみのその小さなお店は大阪ミナミにある。会員制とはうたってないがそのほとんどのお客が口コミだけで集まった半ば会員制のサロン。私のきっかけはオーナーからの誘い。オーナーとの付き合いは落語会のお客と演者という関係から始まっている。(思い起こせばその時の観客は十名に満たずまるでガラガラだったように思う)その店内にはいつも静かにクラシックが流れ、ギャラリバーとうたっているだけのことはあつて絵や写真が月毎に替りいつも訪れる客の目を楽しませてくれる。客層もどこかアカデミックな方が多く、交わされる話題は絵画や音楽、演劇、食と健康・・・多岐に渡って、私もここへ来るたびいつも何かしら常ヒントを頂いて帰る。こんな空間を支えているのは生甲斐で店を始めたというオーナーの心意気とその人脈。先日も教育の話題で喧々諤々・・・ちよつと熱くなりすぎたかも知れない。我

ながらいつも反省しきりである。そんなバーで昼間の空いている時間を利用して水彩画教室が開かれることになったのがかれこれ一年ほど前のことだ。月一回のペースで寺田知世とおっしゃる画家の先生が指導して下さる。彼女もこのバーの常連で私の飲み仲間である。奈良の山奥からわざわざ出てくる彼女が一人グラスを傾ける店はミナミではここだけというからよほどここでの居心地がいいのであろう。ところで彼女は現在この会派にも属していない一匹狼の画家である。勿論絵の実力も相当なので彼女の生活や行く末を心配する向きからその筋への橋渡しを買って出る者も多い。しかし、どうも彼女は組織に属するのが嫌な性分らしくことごとくそれらを断り続けている。組織に属した方が作品を発表する機会も増え、絵の評価も上がりもつと売れるに決まっているだろうに決して彼女はそれを良しとはしない。地位とか名誉とかそんなものとは極力無縁でいたいというのが画伯の本音だろうか。これは当人ではなく彼女をよく知る人から聞いた話なので言い切れる事ではないが日頃の言動からみてそれは十分に頷ける。彼女は進んで自分からはこの話をしなからないし私も聞かない。でも私も含む店の常連は皆何となくそれを感じとつていてそんな彼女の生き方や作品を支持している。「あの子は損な性格やで。しんどい道

選びよんなあ」。これは彼女に対する最高の賛美であり誉め言葉である。当人にしてこれが一番心地よい生き方なのだろう。彼女は今まさに絵筆一本で闘っている。不条理な話であるが芸能や芸術に携わる者はその本道とは全く関係のないところでの闘いにとかく翻弄されがちである。それを糧にしていくのも芸人であり芸術家だと言われればそれまでだが、とにかく良い悪いは別にして政治の腕力が幅をきかせているのはどの世界も同じらしい・・・その日も私やオーナーを含む男性五人に店のママさん(昼間はピアノの先生だがここでは当サロンの管理人的存在)が店のカウンターに並び、その時ばかりは音楽も消して完全無音の静かな空間の中ただひたすらにキャンパスに向かっていた。先生の指導はあまり多くを語らずワンポイントアドバイスやヒントのみ。「ここんとこちよつとメリハリ入れた方がええなあ」「そこはあんまり描きすぎない方がええかな」・・・指摘されることは絵も落語も狂言も舞踊もよく似ている。メリハリ・省略・間・・・モノを表現するということはすべからくつながっているものだと実感する。それにしても彼女の指摘はいつもの確で何より無駄な言葉が一切ない。そんなアドバイスからしばしば又沈黙のときが流れた。実はこの沈黙こそが私が求めていたものだ。家に居てもこつ

う時間は作れないこともなからうが自宅の居間も書斎もどうも雑音が多すぎてなかなかこういう気分にはなれない。書きかけの原稿や積み重なった書物、あらゆる雑多なものがモノを言う。今はあえてこういう場に身を置くことが今の私にとって最高の贅沢であり至福のひとつときなのです。

ところで私は落語教室の講師をしている。受講生の多くは会社帰りや学校帰りに寄ってくる。最近の受講生の傾向として目立つのは営業職のように仕事で会話というものを特に必要としている方よりむしろ喋る機会の少ない技術系の方のほうである。落語教室をコミュニケーション、話し方講座というように仕事に直接どう生かそうかというのではなく、むしろ仕事に全く関係のないところをねらって落語を学びに来ている。私自身かつて趣味や安らぎの時間であったはずの落語や狂言も哀しいかな今はそれほどばかりではない。好きでやっているには違いないが大きな会など発表が近づくにつれ知恵熱がしばしば。そこで今、私が癒しや気分転換にしているのがウクレレ演奏であり水彩画教室である。そのおかげで気分を保っている。また、これも落語教室に見られる傾向だが受講生には日頃暇を持て余している者よりむしろ日頃忙しい人の方が多い。ある設計技師の場合「もう仕事をやたら詰まっってなかなか休みの日が取れませ

んねん。せめてこういうところに来とかな息が詰まりそうで」「忙しい人ほど上手く時間を捻出する。

やがて絵画教室もおひらきの時間が近づくと全員の絵がカウンターの前に貼り出された。「蝶六さん、この辺の空白が絵を生かしてるわ。やっぱり落語家さんは間（ま）がええわ、さすがやね」寺田先生は絵画の世界では一匹狼を貫いているものの誉め上手なところがあつて人の気を掴むに長けている。落語家がどう言われれば嬉しいかつボをよく心得ていらつしやる。受講生各人にそれぞれのいいところや面白い点、今後の課題を的確に指摘しながら加えて辛辣な意見も嫌味なくさらりとおつしやる。絵画教室から得たものは絵の技術もさることながら表現することの楽しさや気持ちの伝え方、人の生き方等々……。いつもながら沈黙の三時間は充実のひとつときであった。さて、ここに作家の清水義範氏が朝日新聞に書かれたコラムがある。最近の「勉強本ブーム」に苦言を呈する形で述べたものがそこからちよつと抜粋させて頂く。

「（前略）教養、という言葉はなかなか微妙で、ある人々にとってはごく知識をひけらかす感じのいやみな言葉かも知れない。知識誇りであり、知っていることを鼻にかけるようなイメージもあるから。しかし、真の教養のことを思い出してほしい。

教養とは、好きなことを夢中でやっていたら自然に身につけてしまった力、のことである。楽しいから、それが好きだから、遊びとしてする勉強にも目を向けてほしいと私は思う。そういう勉強ならば、していること自体がお楽しみなのだから、効率なんて求めるはずがないのである。なるべくゆつくり、全部知りつくしたい、と思うくらいのものだ。勉強本の教養に従って効率よく勉強しているから不安はない、とばかり考えているのは少し寂しい。趣味でいろいろ勉強しているんです、という人間のほうが、彩りがあつて豊かだと思つのだが。（後略）」

・・・絵画教室もおひらきを迎えバーの営業時間になると先生も一人のお客となりカウンターに腰掛けた。いつものようにお客同志の会話も程よく弾み、終電の時間を迎えた者から去っていく。彼女も「いや、もうこんな時間、はよ帰らんと電車がなくなる」と言いながら奈良の田舎へと足早に帰っていった。ちなみにその日のバーでお客が着にしたのは彼女が庭で摘み取りお手製で作ったという季節の惣菜。度々お裾分けという形でその日来たお客全員に振る舞われる。彼女は絵の楽しさと共にこうして季節をも一緒に届けてくれる。彼女の絵の豊かさはこういう季節を愛でるゆとりから来ているのだろう。・・・そう言えば「忙し」ばかりを連発する人に「教養」も

「豊かさ」も感じた試しがない。そう忙しくもない癖に要領が悪いだけであくせくしている私はおおいに反省しなければならぬ。あくせくしているからこそあえてわざとゆとりの時間を作る。難しいことではあるが、今はせめてこの水彩画教室の時間を大切に守っていかうと思っている。(了)

2008.5.26



森五六九(もり) (ごろく)

大阪芸術大学を中退して故桂春蝶の門弟となり落語家桂蝶六として活躍する一方、大蔵流狂言方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大阪アニメーションスクール、大阪シナリオ学校等の非常勤講師の他、ECCアーティストカレッジ落語教室の主任講師や府立桃谷高等学校定時制昼間部・夜間部の特別非常勤講師を勤め「高座」のみならず「講座」の展開も広げている。今年四月、大阪青山大学客員教授に任命される。

物言うつからだ5

金久蒼汲

女性が男性の背中に惚れるというのは、今も昔もよく聞く話です。仕事に没頭している背中に勇ましさを感じ、疲れきった背中に哀愁を感じ、隣で寝ている背中に安らぎを感じるのだそうです。感受性豊かな、女性ならではの感情でしょうか。ドラマや映画、小説や歌謡曲に至るまで、こうした表現がよく見受けられるように思います。

さて、こうした女性ならではの「惚れる」という感情だけにとどまらず、人が人の背中(後ろ姿)から、何かしらの意思や感情を読み取るということは、私たちの日常生活の中でも思い当たることはないでしょうか。私は人の背中を何気なく眺めているのが好きです。もちろん見ず知らずの他人の後ろ姿からは、「この人疲れているのかな」「何か嬉しいことでもあったのかな」という程度のことしか感じ取れないかも知れませんが、普段から交流のある人や話をしたことのある人、気になる人であれば、ある程度その人の想いや心情を感じ取ることがあるように思います。たとえ何も言わなくても、ふとその人の背中から心情が垣間見えたり、口では強がっても後ろ姿でつい本音を語っていたりするものです。そのよ

うにして読み取る感覚は、読み取る側のその人に対する印象や先入観、置かれている状況によるところが大きいのかも知れませんが。しかし、ここで採り上げたいのは、そうしたイメージや状況を遙かに上回る、もしくは全く寄せ付けないほど、強烈に思想や情念を背中に背負っている人がいるという事です。怒りであったり悲しみであったり、償いであったり願いであったり、想いは人それぞれですが、表情や口調には表さなくとも、その人を衝き動かす、内に秘めた強力な原動力のようなものを背中に投影させている人が存在するという事です。

舞台の上で何かを表現しようとする者にとって、「存在感」といわれるものは実に重要な要素です。それは美しい声であったり、高い技術であったり、若さゆえの華であったり様々ですが、最も肝心なことは、その人物の根底に流れる精神性に起因するものであると思います。表現者はまず根底にその人物を支えている主題とも言える思想や情念を持っていて、それを土台にして自分とは異なる役を演じ、ダンスを踊るわけですから。観客はそうして表現されたものに集中しつつも、どこかでその人物の根底に流れる主題を感じ取り、その善し悪しによって、演技なりダンスなりを評価しているのではないのでしょうか。舞台に立つものは、表現者である前に、一人の人間としてそれぞれ

が生きる主題を持ち得ていなければ、いくら表現する手段に長けていても、本当の意味で観客の脳裏には存在できないのです。先日友人に誘われて、ある女性舞踊家の創作ダンスを観に行きました。最低限の照明と何もない空間で展開される彼女のダンスは、とても四十歳を過ぎているとは思えないほど美しく力強いものでした。鋭敏な足、繊細な指、仏像のような表情、安定した重心、深く揺るぎない呼吸、どこからどう見ても一切隙が見当たりませんでした。また特筆すべきは彼女の背中です。正面を向いてダンスをしているのに、背中の筋肉が巧みに連動して波打っているのが見えるほど躍動感に溢れたものでした。その鍛え抜かれた無駄のない背中は、彼女が後ろを向いた途端にさらに力強さを増し、正面を向いている時と同じか、むしろそれ以上の意思を持つて観客に訴えかけてくるのです。隣で彼女と同じように踊っているダンサーたちが、同じように後ろを向いた途端にその存在が消えていく中で、彼女の背中だけが表情を様々に変えながらその存在を保ち続けているのです。観客がそのように感じられたのは、彼女の技術や振り、作品のテーマや構成が見事であることが要因の一部であることはもちろんですが、それ以上に、彼女の根底に流れる揺るぎない精神性がその背中に投影され、存在感となって観客の

心に響いたからであると思います。まさしくダンスを通して彼女の思想・情念を伴った人間的資質が観客の心を揺り動かしたと言えるでしょう。人々の目に触れる正面だけは要領よく取り繕って、裏を返せばスツカラカンの昨今のテレビ、映画、舞台の世界において、彼女のように本物の存在感を放ち続けられる表現者に出会えることは、とても幸せで心強い思いがします。彼女の表現に出会えた観客は、今後また違う作品に出会ったとき、きっとその評価の基準が好ましい方向へと変わっているはずで、私もそんな観客の一人であり、そしてまた彼女のように、観客に堂々と背中を向けていられる表現者でありたいと思います。



金久蒼次(かねひさそうきゆう)

大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。演劇人としての肉體訓練の重要さを自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。自国の古典芸能を体得し、より人間らしく生きるための「古典演劇教育論」の確立を目指す。イラン公演、インドネシア公演に参加。現在、橋本市こども狂言教室、NHK大阪文化センター講師。

関係と影響

久保朋子

影響を受けやすい性質です。岡本太郎の言葉を読み、ピカソの画集を見ると、身体中の血がざわざわと騒ぎ、真っ赤な服を着て家を飛び出したくなります。モーツァルトのピアノ曲を聴くと、心は穏やかになり、水やりを忘れていた植物のことを思い出し世話をします。アレルギー体質で花粉や埃が散れば、くしゃみや鼻水が止まりません。哀しい映画を観てはもらい泣きし、くるくると表情を変える赤ん坊を見れば、口元が緩んでしまう。自分の周囲にあるものをいちいち感じとって反応します。泣き虫で臆病、引つ込み思案な子どもでしたから、勇気ある泣かない大人になることは、幼い頃からの夢でした。

人間はオギャーと生まれたときから、自分のことを理解してほしいと魂が叫んでいます。私を見て！私の話を聞いて！と強いメッセージを送り続けています。私はそのメッセージにとっても興味があります。言葉以上に身体はおしゃべりです。ダンスを踊らなくとも、しぐさや声・目は多くのことを語ります。相手がどんな声をしてどんな

目をして、どんな身体で話をするのか、私は自身の身体を使つて聴きます。

大学の同期で、会話好きの友人がいます。「会話をしていると、一人で考えるときよりも自分の気持ちを整理されてゆく。また自分はこんな風に考えていたのか、と新しく発見する」と彼は言います。相手と話しているのに自分のことを理解してゆくなんて面白いです。相手は自分の鏡になります。彼の会話を観察していると、何を話すのかという会話のテーマよりも、会話のキャッチボール自体を楽しんでいるように見えます。できるだけキャッチボールを長く続けたいので、相手が投げるボールはどんな受け取りにくいものでも落とさず取りに行く。彼は決して相手を無視しません。舞台の上でははいけないこともまた、無視することです。相手が居るのに構わず自分ひとり勝手にやってしまうとは完全に相手は取り残されてしまい、関係は成り立ちません。相手の言葉に反応し、それを投げ返す台詞のキャッチボール、地謡と小舞の呼吸の駆け引き、そして観客の反応。舞台空間では全てが繊細に動いています。相手の言葉をきちん聴く、相手の動きや表情をしっかりと見る、反応する、そうして初めて自分のメッセージを投げる事ができます。相手に影響されるからこそ伝えたくなり、踊りたくになります。

今年の初めに、旅行でヴェトナムに行きました。ハノイ郊外、湖のある小さな村に二泊、村の日常にお邪魔してきました。アジアの美しい原風景、はつらつと生きる人々の表情、沢山のおもてなしや心づくしに心が満たされました。私はお礼の気持ちを伝えたいと強く思いました。ヴェトナム語は全く分かりません。私は村の人たちの前で感謝を込め、小舞「雪山」を舞いました。私の舞を観る人たちの表情はずつと笑顔で、何か声を出していて、目がキラキラしていました。私は彼らの姿を観て、ああ小舞で贈り物ができたんだな、と思いました。身体の中に「雪山」があったので、私は皆にお礼を言うことができたのだと確信し、「雪山」に感謝しました。村の子供達にバレエを教えて一緒に踊ったこともとても楽しかった。自分はこういうことのために踊り続けているのかもしれないと感じました。見てくれている人々の表情や子供達のはしゃぐ姿こそ、ほんとうのダンスで、そのダンスを観たいから一生懸命レッスンを続けるのかもしれない。私は踊り手ではなく観客です。

人間が関係を結ぶと、いつも新しい何かを生み出します。対立 調和 感情 愛情・・・お互いが影響し合うから生まれるものです。人と関わりあうとは何とも面倒で煩わしいことでもあります。けれども誰かと関係せ

ずには生きられません。人と人がきちんと向かい合い、一人一人（相手と自分、そして観客）にとっても繊細に影響し合うことはつまり、舞台を創るということです。芸大を卒業して4年、やっとそのことに気づき始めております。そしてそれが、舞台空間だけでなく日常でもまた明確になれば、今の私達に欠落しているものが見えてくるかもしれません。独りぼつち家の中でじつとしたいときもあります。けれどもいつかは飛び出して、誰かに何かを伝えたくなり、誰かの声を聞きたくなります。関わりあいたいという欲望は人間の本能の中に組み込まれているのだと思います。人と人がつながることは自分と相手、それを見る観客全てが包まれて関係ができる。一人で寂しいという思いを誰かに伝えたくって仕方が無い。だから演劇や絵画、音楽が生まれ、影響されるからこそ、それが原動力となり、何か創造するのであれば、影響を受けることを怖がりません。臆病で自信がなく、震えながらも自分の姿を曝け出して舞台に立つ。「私は生きているのだ！」と全身で叫びたいという夢。そしてもう一つ。自分以外の相手、舞台に立つ相手と客席で観る相手、彼らがどんな表情で何を語るのかを全身で聴きたい。舞台について、人間について、私はやっと学びはじめたところのようです。



久保朋子(くぼ ともこ)
 大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。モダンバレエ・ダンスを勉強中。身体的な観点より、小舞に興味を持つ。去年より安東伸元のもと、日本の古典・人間の本質を学ぶ。

大和座狂言事務所関連 催しのお知らせ

七月

二日【水】『幼児のための狂言鑑賞会』

開演：午前10時 (非公開)

場所：ピッコロ保育園

四日【金】〜十四日【月】

『二ハワールド・クルーズノ洋上船内狂言』

「しびり」「蝸牛」「酔はじかみ」「講話」

二十四日【木】

『蝶六の会〜天神祭りは音曲と共に』

開場：午後六時・開演：午後六時四十分

場所：天満天神繁昌亭〇六六三五二四八七四

入場：未就学児入場不可

前売り 二〇 円

当 日 二五 円

小・中学生 一五 円

身障者・高校生・大学生 一八 円

演目：落語「開口一番」桂吉の丞

「豊竹屋」桂蝶六

「稽古屋」桂春雨

「猫の忠信」桂蝶六

・狂言「千鳥」

安東伸元・森五六九・金久蒼汲

前売り：チケットぴあ・ファミリマート・サークルK・サンクス・賑わいや・天満・天神繁昌亭
 お問い合わせ：賑わいや
 〇六六一六七・五二五

二十六日【土】第三回『富松神社新能』

開演：午後五時三十分

場所：富松神社

入場：無料(雨天中止)

能：「土蜘蛛」山村啓雄他

狂言：「太刀奪」安東伸元・金久蒼汲・原斗轟

お問い合わせ：賑尼崎市総合文化センター

〇六六四八七・九一

八月

一日【金】 昼・夜二部公演

A&Hホールシリーズ公演 その五十四

第一部 開演：午後二時

夏休み特別企画 小学生を対象にした

《親子参加型体験狂言教室》

狂言『茸(くさびら)』

演習 謡って、面をつけて、動いてみよう

体験演習講座の修了証書をお渡しします。

入場料

一般(大人)(一名) 一五 円
小・中学生(一名) 五 円親子ペア(二名) 一五 円
日生

第二部

開演：午後六時三分

《笑劇の古典力》・心を斬り立てる笑い

狂言『伊文字』

主 人：山田師久

女・通行人：井上放雲

太郎冠者：寺西将星

狂言『千鳥』

酒 屋：安東伸元

主 人：原斗轟

太郎冠者：金久蒼汲

歌唱演習「囃し立てる謡」 指導：安東伸元

入場料 会員 一五 円

一般 二〇 円

学生 一五 円

小学生以下無料

お問い合わせ A & Hホール

六六八七三二六七

編集後記

大和座は毎年多数の学校公演を行っています。先日は久しぶりに学校公演のお手伝いに行ってきました。生まれて始めて能楽堂に来た子ども達は興味津々です。大和座の学校公演には演習コーナーがあり、希望する子ども達を能舞台上に上げ、舞台の雰囲気、木の板の感触、そして声の響きなどを実際体験してもらっています。大和座の催しでお馴染みの謡の演習は全員でやります。子ども達は、最初は恥ずかしがったりもしますが、やがて能楽堂の響きに心地よさを感じるので、とても大きな声で謡をうたいます。子ども達はまだ気づかないでしょうけれど、やがて成人し世界に羽ばたいていく時、この日の経験は必ず力になるはずですよ。

さて、こういった経験をもっと多くの子ども達にと思い夏休み特別企画としてA & Hホールシリーズ公演に「子ども体験狂言教室」を開いたのが2006年です。この企画は好評で今年も8月の公演は、第一部は子ども向けに、第二部は大人向けのプログラムを組んでいます。第一部に上演する「茸(くらびら)」という狂言にはたくさんの「きのこ」が出てきますが、そのきのこ役を当日参加した子ども達と一緒にやってみようと思います。

どうぞご期待ください。 秀

【訂正とお詫び】2008年4月に発行致しました大和座通信の号数に誤りがありました。4月号は「九十四号」となっておりますが、正しくは「九五号」です。訂正をもってお詫びとさせていただきます。なお、号数を訂正した通信は大和座狂言事務所ホームページからダウンロードすることができます。

発行日：二〇〇八年六月二十五日

編者 許 秀美

発行者 安東伸元

大和座狂言事務所

代表 安東伸元

〒五五五一〇八四二

吹田市千里山東二丁目三之三

TEL 06(6384)5016

FAX 06(6384)0870

http://homepage3.nifty.com/yamatoza/
e-mail: NQC57616@nifty.com